プラットフォームにが入り、電車が停止した。
ドアが開く音で目をあけた。
人が降り、人が乗ってくる。
僕はうとうとしながらも、開くドアの方を見ていた。
人が流れ込んでくる。
その時だった。
その、人の流れの中に、白いブラウスと、
うすい紺のスカートをはいた女の人がいた。
その人は、そのまま、僕の前に立った。
その時、その胸のあたりに僕の視線があった。
僕は、そのまま、ぼーとしながら、顔を見あげた。
八幡のあの人だった。
その人は、つり革を手に、僕を見下ろしていた。
ドアがしまり、電車はゆっくりと丹波橋の駅を出た。
僕とその子はじっと視線が合ったままだった。
僕は、自分の制服のうちポケットに、
この間書いたラブレターが
入っているのを思い出した。
時間は五時五十六分だった。
僕の頭の中は真っ白になった。